

みあかり



松阪市飯南町横野・四番組どんど火

古代から「火」は神聖なものとして扱われてきた。周りを照らし、焼き払うことにより不浄を浄化する。その様な教化特集号にしたいと願い「みあかり」と名付けた。

目次

- | | |
|------------------|-------|
| ●神宮、私の原風景 | P 2～3 |
| ●宮本神社 鮎の特殊神饌 | P 4 |
| ●生桑長松神社 大鏡餅神事 | P 5 |
| ●阿山支部 舞姫・雅楽講習会 | P 6 |
| ●鳥羽支部 神宮大麻頒布促進運動 | P 7 |
| ●緑のコーナー 千王神社のふじ | P 8 |

教化特集号 第19号

三重県神社庁
庁報編集委員会

神宮、私の原風景



楠田 枝里子

厚生中学校のそばには、外宮さんがあり、下校の途中、友人たちとよく勾玉池を散歩したものだ。

四季の楽しみがそこにはあった。

五月に咲き誇っていた菖蒲の花の眩しい情景が、今も目に鮮やかによみがえる。

伊勢は、特別な町である。天照大神さんをお祭りする内宮と、豊受大神さんの外宮を中心に、百二十五ものお社やお宮が点在し、人々の日々の暮らしに溶け込んでいる。

私の通った厚生小学校のすぐ隣に、月夜見さんがあり、そこでよく写生をした。毎年神宮主催の絵画コンテストが開催され、そこで神宮大宮司賞をいただいたのは、誇らしい思い出だ。

伊勢高校の御幸道路をはさんで向かい側には、倭姫宮さんが広がっていて、緑に包まれた玉砂利の道を、すがすがしい空気を胸いっぱい吸い込んで歩く時間が、私は大好きだった。美術の授業ではそこで木々を描き、昼休みには、徴古館の前の広場でお弁当を広げた。

そう、伊勢の町で、私たちは、たくさんの神々とともに、いっぱい緑のなかで暮らしていた。こんなありがたい場所が、他にあるだろうか。

私は、しょっちゅう、お宮にお参りをした。初詣やお願い事、大晦日のどんどん火などは勿論のこと、特別な理由がなくても、何かという、神宮を訪ねた。内宮、外宮の正殿だけではなく、荒祭宮さんや、多賀宮さん、風の神様や土の神様など、多くの別宮さんに、好んで足を運んだ。

神聖な空間だった。みるみるう

ちに、自分の身にまわりついていた余分なものが剥ぎ取られて、心が裸になっていくのを感じた。ちっぽけなひとつの命が、広大な自然のなかに優しく抱かれた。自然への畏怖と敬いという最も根源的な宗教感情というものを、幼いながらも、体感することができていたのだと思う。

私が東京を生活の拠点に移して、すでに四十年が過ぎようとしている。折に触れ懐かしく感じるのは、こうした神宮の森だ。帰省しても実家に居るより、神宮の緑のなかに身を置いているほうが、

「ああ、故郷に帰ってきたなあ」という思いを強くする。

「これが、私の原風景なのだ」としみじみ感じるのである。

今では、東京から、私は世界の国々へと旅をしている。ヨーロッパ

パ、アジア、アメリカ……数え切れない場所を訪ねて忙しい日々を送っている。異なった風景、異なった文化、異なった人々の異なった生活に触れるのは、とても刺激的で面白い。しかし、そんな私の原点にあるのは、常に神宮の森なのである。

全く対極にある地に足を踏み入れたといえば、南米ペルー、ナスカの砂漠だろうか。そこは、地球の反対側にあり、「ナスカの地上絵」という世界遺産でよく知られるところだ。私は、ナスカの地上絵の研究と保護活動のために人生を捧げた女性研究者マリア・ライヘに心惹かれ、通い詰めて、『ナスカ砂の王国』（文藝春秋社）というノンフィクションを上梓することとなった。さらには、彼女の推し進めた地上絵の保護活動を応

援するため、「マリア・ライヘ基金」を設立し、博物館の建設など、支援活動を展開している。私自身、数多くの貴重な出会いに導かれて、やるべき仕事を与えられたということだと、理解している。

そのナスカの地は、前も後も、右も左も、えんえん砂しかないという不毛の大地である。何もない無の世界と、故郷の神宮の豊かな森。何という違いだろうか。

しかし……と、私は考え直してみる。真反対にある世界を行き来しているからこそ、心底その地の魅力を、味わうことができるのではないだろうか。

清らかな水の流れ、天を突く背高の木々、緑のなかでは鳥が歌い、さまざまな生き物が営みを続けている。そんな豊穡の地を知っているからなおいっそう、ナスカの砂

漠の巨大な無が、圧倒的な存在感をもって迫ってくるのだ。振り子が、右に大きくふれれば、今度は左に振り切れる、というふうに。

どんな状況で、いつでも、どこにいても、帰っていける美しい原点を持っているというのは、なんと幸せなことだろう。私の心は、今日も、神宮の森を渡る緑の風に揺れている。



楠田枝里子 プロフィール

司会者・エッセイスト。

三重県伊勢市生まれ。

東京理科大学文学部を卒業後、日本テレビのアナウンサーを経て、現在フリー。テレビ番組の司会や、ノンフィクション、エッセイ、絵本など、幅広い創作活動を続けている。主な出演番組は、「なるほど・ザ・ワールド」「世界まる見えテレビ特捜部」「FNS歌謡祭」など。

著書は、「ナスカ砂の王国」「不思議の国のエリコ」「チョコレートの奇跡」他多数。

公式ホームページ

<http://www.erikokusuta.com>

宮本神社 「鮎の特殊神饌」

伊勢市佐八町^{さやちやう}の宮本神社（宮司羽根宣之）は古くから伝わる特殊な神饌で知られている。御祭神の「天忍穂海人命」は元々漁を生業とされていたが、倭姫命が皇大神宮を伊勢に遷御された時、勅命を受けて宮川の年魚（鮎）を奉納したことから、後に土地の氏神として祀られた。このため宮本神社では、毎年一月上旬の日曜日に斎行される「新年祭」に鮎の「なれずし」をお供えしている。

なれずし作りには三カ月以上を要する。その年の「当番」の氏子六名が、まず九月から十月にかけて、宮川で落ち鮎を獲る。漁は網を使うか、地元で「ガリ」と呼ばれる引掛け釣りで行っている。獲れた中からオスだけを選び、内臓を取り除いて強めの塩漬けにす

る。そしてその年の気候にもよるが、十二月上旬頃を目安に本漬けの作業が行われる。

早朝、塩漬けを保管している家に当番の六人が集まって作業が開始される。まず鱗やヒレ、エラと目玉を取り除いて洗い、塩抜きをする。そして、水切りした鮎の腹



に炊きたての白米を詰め、樽の底からご飯↓鮎↓ご飯↓鮎と繰り返し、層を作っていく。鮎百匹に対してご飯二升、手水として日本酒を約五合と、かなり多めに使っている。当番は十年に一度くらいの割合で廻ってくるそうだが、その年によってどのような味になるのか、腕の見せ所だ。

全て漬け終わると樽に落とし蓋

をして、二十キロ程の重石をし、そのまま三、四十日置いておくところやうどいい「なれ」具合になる。

祭典当日、参列者約五十人が見守る中、精進齋した当番の六名と、総代二名が整列し、鮎のなれずしを始め十三台の神饌を本殿にお供えした。

直会でこの鮎を頂くことが出来たが、ほとんど癖もなく、むしろ清廉とも言える爽やかな風味を残



してくれた。

この鮎のなれずし、明治維新までは暮れの二十八日に外宮内宮の両宮に奉納されていた。今ではこの宮本神社だけに残されているが、由緒ある貴重な神饌として、地元の方々の手で、いつまでも後世に伝えて頂きたい。

※参考資料

『宮川のアユ十話』福所邦彦著



特殊神事

いくわながまつ

生桑長松神社『大鏡餅神事』

(四日市市指定民俗文化財)

生桑長松神社(宮司 加藤 一子)は、四日市市の中心部から、北西に四キロメートルほどの生桑町の穏やかな傾斜地に鎮座する。

大鏡餅神事の起源は、度々氾濫する川を鎮めるため、東生桑の長松神社に伝えられてきた神事であった。しかし、天保九年(一八三八)に、西生桑の生桑長松神社と合祀となったことで、同社に受け継がれることになったと伝えられている。



この神事は、町内千百戸のうち九十戸に伝えられているもので、「宮元」の当番十一人と、「宮宿」という代表者の一軒が選ばれ、男性のみで奉仕する。

十一月中旬からしめ縄、薦、むしろ作りが始まり、十二月二十八日に「宮宿」で、五斗(約七十五キロ)のもち米を研ぐ米かしと型杵の組み立てが行われる。二十九日には夜明けとともに釜に火を入れ、神職の

祓いの後、鏡餅つきが始まる。五斗のもち米を十七回に分けてつき、杵に入れ型を整える。

元旦の朝、鏡餅を型杵から取り出し、「宮宿」の床の間に長持ちを据え、「大鏡餅」の飾りつけが始まる。「大

鏡餅」は左右に一体ずつで、長持ちの上に新しい薦を鋪き台を置き、

二段のケーキ形の鏡餅と、その上に一升杵型の四角い餅が乗り、さらに「トンビ」と呼ばれる鳥が羽を広げたような餅を、下段は縦、上段は横と交差するように置く。

一番上の餅に串柿と橙を飾り、昆布を垂らし、二日の朝までお守りする。この間に、明治十八年からの記録が残る『神社年番行司記録』に、「宮宿」、「宮元」の名を記す。

二日の午前三時に、新成人・消防団の若者が、床の間に飾られている「大鏡餅」を長持ちに入れる。午前五時を待って、太い孟宗竹に長持ちが縛られ、「ワッショイ」の掛け声とともに神社の石階を駆



け上がり、本殿に供える為に、「大鏡餅」が再び組まれる。

続いて祭典があり、神楽太鼓が、一番太鼓に続いて二番太鼓に移るやいなや、若者たちは拝殿から一斉に本殿に向かい、無病息災のご利益があるといわれる餅や飾り物を奪い合う。その後、鏡餅は拝殿に運ばれ、「宮元」によって切り分けられ、参拝者に配られる頃には、夜が明けてくる。

このような独特の形をした鏡餅を供えることは、他に例がないことから、戦時中も中断することなく、今日まで伝えられている。しかし、今の少子化による伝承の難しさに加え、年末年始に、「宮元」をもてなす二間続きの部屋と、餅つきの道具が収められる四畳半ほどの部屋の確保など、伝統を守り伝えていく為の課題も多くなっている。

加藤宮司は、「神事によって、地域の絆が深められているので、今後も氏子の協力を得て守っていききたい」と語っている。

阿山支部教化事業報告

『舞姫講習会・雅楽講習会』

阿山支部では例年六月下旬の土日に支部内の舞姫・楽人を対象に「舞姫講習会」及び「雅楽講習会」を陽夫多神社（宮司 神田要文）と春日神社（宮司 神田信忠）にて輪番で開催している。

その歴史は古く「舞姫講習会」は昭和三十年代より、「雅楽講習会」は十数年前より開催されている。

阿山支部は旧阿山郡の四つの町村（阿山町・伊賀町・大山田村・島ヶ原村）で構成されており、管内には十九社のお社がご鎮座されている。現在、楽人が奉仕しているお社が十社、舞姫は十九社すべてのお社で二名～三名が奉仕している。夏祭りを控えた六月に改めて基本から学び直し、舞姫・楽人の更なる技術の向上を目的として毎年開催している。

【舞姫講習会】

今年は六月十八日（土）・十九日（日）の二日間に亘り、陽夫多神社に於いて開催され、阿山支部各社より延べ五十名の児童が参加した。指導には森本巖神社庁祭祀舞講師、大塚孝子助教を迎え、各社で奉納されている豊栄舞の講習を行った。

この地域の舞姫は小学生が奉仕しており、数年の間隔で新しい子供に代わって行く。そのため初めて参加する児童にもわかりやすいように、リズムの取り方や手振り、柳の持ち方など基本から練習している。経験者であっても、神社では年に数回ほどしか奉納することがないため、自己流に陥りやすい。そのため、講師の正しい舞を学びながら、おさらいをする良い機会



となっている。

一年に一度ではあるが、正しい舞を身につけるためにも、新しい舞姫を育成するためにも有意義な研修となっている。

【雅楽講習会】

今年は六月十九日（日）陽夫多神社に於いて開催され、阿山支部各社より六名が参加した。皇學館大学雅楽部から鳳笙・箏・龍笛の三管それぞれ一名ずつの講師を迎えている。

履修曲は普段の祭典奉仕で奏楽

する機会の多い「平調 越天楽」である。

当日は各管にわかれて練習し、最後に神前にて奉納演奏が行われている。

楽人の多くが奉務神社では、概ね各管一名であるため、自分の音が正律か判断しにくい面もあるが、講習会では同じ管の者同士、お互いの音を聞き合う中で切磋琢磨し、よい励みとなっている。

普段、なかなか他の神社の楽人と交流する機会の少ない方々にとっては、貴重な講習会となっている。



鳥羽支部教化事業報告

新興団地への 神宮大麻頒布活動の記録

鳥羽支部（支部長 今村清隆）
では平成十三年より、郊外の団地
世帯への神宮大麻頒布の促進活動
を行っている。

鳥羽市は大まかに行政機関を中
心とする中心部と漁村地域、農村
地域の三つに分かれている。
以前は中心部に人口が密集して

いたが、世代交代が進むにつれ、
郊外に一戸建てを造る団地ブーム
が起きている。

このドーナツ化現象の発生によ
り、密集していた人口は郊外団地
へと分散されるに至ったのである。
以前は氏子区域が明確であり各
神社総代が神宮大麻の頒布に尽力



頒布用に作った白法被

していたが、人口が
郊外へ移ると頒布数
の減少が顕著になっ
た。
新しく造成された
団地に住む人達は、
ともすると氏神様に
対する意識が低く、
自分が氏子であると
いう感覚が希薄であ

るのが現状だ。

この様な状況の中、
急激な減体に危機感
をもった当時の野村
逸良支部長は、団地
世帯への頒布活動を
平成十三年から開始
した。

団地世帯は概ね屋
内、美台、池上地区
の約六百六十戸で、

鳥羽市の八％程度を占めている。

これらの地区への頒布は、当初
有志の神職で行われていたが、昨
年度からは支部神職の全員で活動
している。

頒布は十二月中、二回に亘り行
われる。しかし昼間は留守中の家
も多く、その後二度、三度と訪問
する場合もある。

初年度は白衣白袴で頒布したが、
翌年、支部で白法被を作り、地元
の神社が頒布していることを明確
にした。

また頒布の前には広報紙を団地



の全世帯に配布し、神宮大麻に理
解を深めて貰えるよう努めている。

さらには、神棚がない世帯も多
い為、無償の簡易神棚を準備し、
合わせて頒布している。

最初の頃は、大麻への意識は低
かったが、現在では広く定着しつ
つあり、昨年度では百四十五体を頒
布した。年末になると待ち望んで
いたとの声も聞かれるようになり、
お年寄りには感謝されている。

また、毎年の頒布状況を分析し
た独自の地図を作り、効率的な頒
布を行っている。



「ふじ」の花で 地域のふれあいと町の活性化へ



緑のコーナー

神社の境内にある樹々には創祀以来存在のものと、後世に神職や氏子等の手によって植樹されたものがあります。ここに紹介する「ふじ」は後者の一つです。

津市、千王神社（宮司 中野雅史）は国道23号線を東に入った浜街道に面した位置に鎮座しています。正面の鳥居から拝殿へ向かう参道には石燈籠が並んでいますが、町屋地区には男子の厄祝いとして絵馬や燈籠を奉納する習慣があり、中には天明や寛政の奉納年代が刻まれたものもあります。拝殿入口には、「千王名宮」の扁額が掲げられており、かつてこのあたりが「名田」であったことを示しています。そして、拝殿内の10数枚の絵馬は津市内（旧）に現存している絵馬の中で最も古いものもあり、文化財的価値のあるものと評価されています。



中野宮司のお話によりますと、拝殿西側のふじ棚は、先代宮司の時にある総代がどこかで美しい花をたくさん付けたふじ棚を見て、「うちのお宮さんにも、こんな花を咲かせたい」と、自らの手で苗木を植え育て始めたそうです。やがてふじ棚になるまでとなり受け継いだ宮司や総代は、平成18年から花の見頃の5月初め「千王神社のふじ祭」を開催するようになりました。咲き誇る藤の花の鑑賞と多彩なイベントが催されます。



総代会にとどまらず地元町内会、婦人会、子供会、老人会、消防団、町の活性化を目的とする「町屋百人衆」等が協賛して「町屋の元気印」「町屋の活性化」をキャッチフレーズに、「楽しく遊ぼうヨ・楽しく食べようヨ」と、こま、お手玉、ヨーヨー、けんだま、竹馬、切り絵折り紙等の遊びや、模擬店（ぜんざい、焼きそば、おでん、焼鳥、みたらし団子、綿菓子、ビール、ジュースなど）に、手作りの小物に雑貨と多種多彩の出店。また、野菜の直売、カラオケ、消防自動車の展示もあり、それぞれが得意分野を発揮して祭を盛り上げています。

開催前には地元紙に記事の掲載を依頼し、「千王神社境内のふじの花をご存じですか。きれいな花を見にきてください。ご家族で遊びに来てください。」と総代会長は呼びかけをします。始めてから数年ではありますが、皆で手入れしてふじの花房が大きくなるように、町の元気も和も少しずつふくらんでいるようです。
(津市栗真町屋町946)

※名田…平安時代から中世を通じての基本的土地制度で、開墾、土地購入、押領などによって取得した田地に所有者の名を冠して呼んだ。

教化にともなう原稿・ご意見を

募集しています。(下記編集委員まで)

教化部長	森本 巖 (北牟婁)
編集委員長	宇治土公貞尚 (伊勢)
委員	山際 理也 (志摩)
"	秦 昌弘 (四日市)
"	平野 直裕 (桑名)
"	新山 英洋 (員弁)
"	宮田 幸尋 (上野)
"	常山 和哲 (飯南)
"	多田 久美子 (津)
"	原 忠照 (神社庁)

御社名欄にご利用下さい。

発行所 三重県神社庁 津市鳥居町210-2 ☎059-226-8042 発行日 平成23年 6月30日